様式4

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 共通教育センター

（責任者名）日向　良和
（役職名）共通教育センター長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
	プログラムの履修・修得状況	令和6年度より教養科目の「データサイエンス（リテラシー）」において実施している。また、学部学科共通副専攻プログラム「デジタルシティズンシップ研究」の1科目として開講しており、1年生に対してプログラムの履修案内をおこなっている。 令和7年度：修了者5名 少し増えたが、全学生の1％以下であり、履修数が少ないことが課題である。1年次のデジタルシティズンシップ入門でのおすすめ以外の方法で、学内への浸透を図っていきたい。
	学修成果	修了学生の平均GPAは2.7であり、講義と演習の適切な組み合わせ、教科書の指定などで学修成果が上がっていると考えられる。最後の演習課題などにおける提言なども見ても、現代社会におけるデータサイエンス、AIの活用に対して充分な理解があり、課題などについても指摘がされている。一方で演習課題について人文社会科学系の大学の特性か履修につまずく学生への支援が課題である。
	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	修了学生のアンケート結果については、科目内容が理解できたという回答が多数である。一方でシラバスに書かれている用語で履修を躊躇したというご意見（例えば回帰直線など）があり、シラバスの用語の検討すべきという反省がある。
	学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和7年度までの学生アンケート等では他の学生への推奨度を測っていない。そのため令和8年度から、独自のアンケートにより他学生への推奨度を測定する予定である。
	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	履修者数、履修率の向上が課題である。これは令和6年度から新カリキュラムが始まり、学生への周知が進んでいないことが原因と考えられるため、令和8年度からは入学生に対するガイダンスの中で、プログラムの周知をおこなう。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	現状、プログラム修了者の卒業生が存在しない（令和6年度新入生から開講）ため、活躍状況などは不明である。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	現状、卒業生が存在しないため、内容・手法に対する意見はない。 プログラムの選択科目では、山梨県忍野村の（株）ファナックとの連携をおこなうため、令和8年度以降に教育プログラムに対する意見を聴取する予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること		プログラムでは、現代社会におけるICTの重要性を理解した上で、学生の問題意識をICTを活用して解決する科目となっている。 プログラムの中では、実際に社会で使われているオープンデータを活用することで、ファクトチェックや多様な分析の視点などの必要性を学び、さまざまな社会の場面での応用を検討することが刺激になっている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載		生成系AIが急速に進歩し、大学講義や社会活動の中で急速に利用されていることを踏まえて、学生自身の学びの中でAIを利用し、その便利さと限界を知ることができた上で、では人間が何をすべきなのかという、人文・社会科学系大学特有の命題について学習できる内容を常に検討する予定である。